

サッカー選手の性格に関する一考察

——本学サッカー部員について——

中山 勝 広・渡 辺 隆 嗣

目 次

- I. はじめに
- II. 研究方法
 - 1) 対 象
 - 2) 調査項目
 - 3) 調査期間及び場所
- III. 結果と考察
 - A) 性格（人柄）類型
 - B) 個人ケース（主将の例）
- IV. ま と め

I. は じ め に

サッカーは世界最大の競技人口を持つスポーツである。日本に於ては、東京オリンピックでベスト8になったことを契機として、サッカーブームとなったことは周知の通りである。

サッカーの特徴は言わずとも、手を使わず、足でボールを自由に扱い勝敗を争うスポーツである。22名のプレーヤーが、一つのボールを中心にくり広げる90分間の技術・体力・精神力の結集に、見ている人さえも没頭させてしまう魅力がある。

スポーツは勝敗をその目的の一つとしている。そのためにチームをコーチしているものは、どのようにしたらチームを勝利に導くかを考えている。その一つに団体競技としてはチームのポジショニングが挙げられる。プレーヤーの能力を充分に発揮できるポジショニングは、きっと勝利へのパスポートとなるであろう。

ポジショニングの適性については、身体的な面と精神的な面とが挙げられる。コーチとしては個人のもつ特徴と、ポジションの特性を考慮し、それぞれの能力が充分に発揮されるようにすべきである。

以上の様な観点から、内田・クレペリン精神検査を利用したスポーツマンのもつ性

格については、すでに幾多の研究発表がなされているが^{11), 42), 53), 112)}、いずれもそれらのトップレベル及びそれに近いチームについてである。

今回筆者達は、底辺チームの「本学サッカー部」を過去4年間に渡り、縦断的に追跡してきたものを今後のより効果的な指導法を見いだす一環として、人柄の特徴とポジションの特性について検討を加えてみたものである。

II. 研究方法

1) 対象

昭和51年度から昭和54年度までに本学に在籍した「サッカー部員」延47名である。

内 訳

昭和48年度入部員	8名
〃 49 〃	5名
〃 50 〃	5名
〃 51 〃	9名
〃 52 〃	6名(現4年生)
〃 53 〃	7名(現3年生)
〃 54 〃	7名(現2年生)

2) 調査項目

- i) 性格検査として内田・クレペリン精神作業検査。(小林の判定法による。)⁷⁾(U・K検査)
 - ii) 矢田部・ギルフォード性格検査。(Y・G検査)
 - iii) 部員連絡ノート及び行動メモ
- なおii) iii)の項目についてはi)項目の判定時の参考とした。

3) 調査期間及び場所

各検査の実施時季は、いずれも本学サッカー部の春季・夏季休暇時の合宿練習期間である。合宿は8日から10日間程度の期間で行なわれているが、第1回調査時の昭和51年春季合宿時のみ、初日と最終日の2回実施し、合宿時の精神健康度の変化をみた。

他の合宿時は期間中の中間の日を選び実施した。

第1回調査 昭和51年3月(Y・G実施)

〃 2 〃 〃 〃 4月

〃 3 〃 〃 〃 8月

サッカー選手の性格に関する一考察

第4回調査 昭和52年4月

〃 5 〃 〃 〃 8月 (Y・G実施)

〃 6 〃 〃 〃 53年3月

〃 7 〃 〃 〃 8月

〃 8 〃 〃 〃 54年4月

〃 9 〃 〃 〃 9月 (Y・G実施)

Ⅲ. 結果と考察

本学サッカー部の年間活動日程は表1に示すようである。

表1 サッカー部年間活動

月	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
行事	春季合宿 8～9日		工科系大学 リーグ戦			夏季合宿 8～9日		都学連 リーグ戦			八王子 市民ミニ サッカー大会		

春季合宿はシーズン初めであり、夏季合宿はシーズン中での強化・調整を目的としている。

A) 性格(人柄)類型

過去7年間、延47名のサッカー部員について得た資料をもとにして、それぞれの曲線型を小林の性格10類型に従がって分類したものは、表2に示すようである。

表2 サッカー部員の人柄類型分布

入学 年度	類 型 部数員	神 質	経 型	朗 か 型	じ っ く り 型	温 和 型	地 道 粘 り 型	あ っ さ り 実 行 型	分 裂 型	粘 着 型
48年度	8名						2		4	2
49	5				2		1		1	1
50	5					1	2		2	
51	9			1	2	1	2		3	
52	6			1	1		1		2	1
53	7	1			1		2		3	
54	7				2	2	1	1		1
計	47名	1	2	8	4	11	1	15	5	
%		2.1%	4.3%	17.0%	8.5%	23.5%	2.1%	32.0%	10.6%	

これによると、部員の約32% (15名) が分裂型に属して最も多く、次いで地道粘り型が23.5% (11名) を占め、この2つの類型に半数の者が集中していることが目につ

く。以下じっくり型8名、粘着型5名、温和型4名と続いている。しかし、その他の類型、特に強気敢行型および内的安定型などはみられない。

このことすなわち、分裂型の性格をもつ者が多いということは、本学が工科系の大学であることの表われであると考えられる。

表3は、同じ工科系大学及び工学部をもつ大学の人柄類型の主なるものを挙げたものである。これによると、やはり工学部に於ては分裂型の者が多くを占めていることに共通点を見いだすことができる。

表3 工科系大学(学部)の主なる人柄類型(%)

類 型 大学名	分 裂 型	粘 着 型	地道粘り型	じっくり型	(備 考)
東京工大	24.1%	18.2%	20.7%		藤江調べ
明治大(工)	29.4	18.5	12.7	13.1	星野調べ
成蹊大(工)	28.8	15.1	10.5	9.6	
東京高専	39.9	20.2	9.2	13.3	竹信調べ

このことについて星野は³⁾『工科系の学生は、人と人との関係に関与することが不得手であり、協調性に欠け、自己中心的な傾向が強いものとみられる。また仕事の選択性も強く、始めるまでに時間が必要であるが、一たび動き出すと凝ってやり続けるといった特徴がみられる。従って、どうしても理論的にものごとを考える態度は工学という学問向きとも言えよう。』と述べている。

またひいでたスポーツマンにも分裂型の者が多いことは、過去の調査から知ることができる⁵⁾。

ここでサッカーの持つスポーツとしての特性について全体的なことを述べることにする。

サッカーの特質として、岡野・浅見⁶⁾らは次の5項目をあげている。

(1) 自主性

試合中に作戦タイムがとれる他のスポーツと異り、流動的な局面に対し、「何をなすべきか。」を自己中心的でなく、常にチームにとって何をなすべきかを第一に考えた行動がとれることは、サッカー選手として強く要求されることである。

(2) 創造性

囲碁には「定石はあるが同じ棋譜は二つとない。」と言われる様に、サッカーに於ても練習で攻防のパターンを知っていても、流動的な戦況の中でそれらを活用するのは選手自信の判断力である。自主的な判断は次の局面を創り出すために欠くことので

きない創造力となることを認識しなくてはならない。

(3) 協調性

「サッカーの最良の戦術は友情である。」とクラマーは言った。サッカーはチームスポーツである以上、お互の信頼感を平常の練習や生活のなかでつちかっていたいかななくてはならない。このようなチームスピリットが勝利への原動力であり、それを支えるものが協調性であるといえる。

(4) 意外性

「ボールは丸い」という表現がある。どちらにしろんでも不思議ではない。今日のサッカーでは意外性が勝利を左右するといっても過言ではあるまい。

意外性のあるプレーとは、相手が予測できないプレーのことである。対敵動作は常に予測、すなわち相手の次の動きを読むことで可能となる。「サッカーは読みのスポーツである。」という表現があるが、この意外性に富んだプレーヤーこそサッカーの神髄と言える。

(5) 闘争性

全てのスポーツは勝敗を争うものである。この闘争心は人間の持つ本能とも言えよう。サッカーに於ても、1つのボールをめぐる頭脳・技術の闘いと同時に肉体と魂同志の闘いでもある。それ故にサッカーを「男のスポーツ」と言わしめる所以である。

また一般的なスポーツマンのもつ精神特性について加賀は次のように述べている⁹⁾。『スポーツマンのもつべき心理的資質として、勇気、積極性、精神力の集中、闘志、忍耐力、粘り強さ、克己心、協調性などで、これらはいわゆる根性のそれぞれの一面を取り出したものといえる。

また精神力が問題となる危機的ないし緊張場面への適応や、目標指向的協力の持続の面から精神的活動を5つに大別すると

- (1) 忍耐・持久
- (2) 敢闘・局面打開
- (3) 判断・果断
- (4) 沈着・平常心
- (5) 創意・工夫

である。判断や創意を精神力として重視しないで技術の問題の下位に置いたりするのは良くない。

これらの能力によって、困難な事態の解決法を見いだし、苦しい条件に耐える希望をもち、努力遂行の方向を定められるものである。』と述べている。

さらに太田¹²⁾は、日本代表選手など、サッカー選手のパーソナリティーを調査し、『サッカー選手は常識的で協調性がある。またFWは比較的協調性が少なく、BKはもくもくと行動する。といったポジションの特性をもっている』とも述べている。

以上のことがらをふまえて、本学サッカー部員の人柄について分析してみると、最も多い分裂型の持つ特徴としては、前にも述べたように、人づきあいをあまり好まず、自分の気の向いたことは凝って集中し、ものの考え方としては、現実からややもすれば遊離しやすく、感情は腹の中ではきわめて敏感に反応するが、それが表面に出てこないで表情が乏しく、自分が選んだことには強いが、そうでなければ強い関心をあまり示さない。

また地道粘り型の持つ特徴は、人に馴れるのに手間取るので交友範囲は狭いが、一たびなじめばその交りは長い。また仕事ぶりも、早くはないがやり出せばまじめに、確実に、手賢くこつこつとやるようである。ものの考え方は、理論家ではないが筋道を通し、納得がいかないと動かないといった柔軟性、融通性に欠ける面もみられる。

以上、分裂型と地道粘り型の持つ特徴から、本学サッカー部員は、融通性に乏しく、とりつきが遅く、積極性に欠ける者が多いとすることができる。

また試合場面においては、勝負に対しての粘りが少なく、あきらめも以外に早く、味方が攻撃をしかけている間は得点をしようとプレーを続けるが、一旦相手方にボールが渡ると取り返そうとする意欲を持ったプレーヤーが少なく、全体的に消極的なプレーになってしまう者が多いようである。

以上の様に、分裂型・地道粘り型の性格特徴を持ったプレーヤーが半数以上を占めているクラブであるので、試合中、自分達のペースで調子に乗れば積極的なプレーが続出し、チームにとって好ましい方向で試合が進展することがあるので、結果的に良い成果を収める場合もあるが、相手方ペースで試合が進展すると、終始消極的なプレーが多く、各人の欠点ばかりが目立つチームとなっていることもうなずけることである。

次に、ポジション別にみた類型は、表4のようである。これによれば、やはり各ポジションにまんべんなく見られるのが分裂型である。分裂型を除いた類型で各ポジションを分析すると、守備を主眼としたDF（ディフェンダー）では、地道粘り型が多く、以下じっくり型と続いている。またMF（ミッドフィールダー）は攻守のかなめとして重要なポジションであるが、ここにはじっくり型・粘着型・地道粘り型と多岐にわたっていることがわかる。得点を狙うFW（フォワード）は、地道粘り型・朗らか型・じっくり型が多く見られる。

サッカー選手の性格に関する一考察

表4 ポジション別にみた人柄類型

ポジション	部員	類型 神質 経型	朗か ら型	じっくり 型	温和型	地道 粘り型	あっさり 実行型	分裂型	粘着型
GK	5名				1	1		3	
DF(FB)	15			3	2	5		3	2
MF(HB)	14	1		3	1	2		4	3
FW	13		2	2		3	1	5	
計	47名	1	2	8	4	11	1	15	5

次にポジションの特徴とプレイヤーの適性について、上記の結果を分析してみることにする。

各ポジションの特徴は、GKはゴールを守る最後のプレイヤーであり、攻撃のための最初のプレイヤーでもある。従ってボールに対する鋭い判断とともに、機敏な身のこなしと決断力のある着実なプレーが望まれるポジションである。本学部員では過去5名のGKがいたが、中・高校時代のGK経験者は1名しかいなかった。従って自分からGKを望んだ者は彼一人であり、他の者達は仲間からの勧めで否応なしにやらされてしまったといえる。このような状況で、分裂型の持つ特徴である「気に入った仕事でやる気を出した時は強いが気の向かない仕事にはあまり関心を示さず、気まま、ひとりよがりになりやすい」といった欠点の目立つプレイヤーであるので、当然のことながら試合中での単純ミスが多く、勝ちを失うことも多かったことがうなずける。

DFの特徴はもちろん守備に重点を置くことであるが、最近のサッカーでは特に全員攻撃、全員守備をとっているチームが多いために、攻撃に参加することもしばしばである。従って正しい状況判断に基く決断力のある、力強い、着実で粘りのあるプレーを必要とするポジションである。そういった面では本学部員に粘着型が多くを占めていることは、ほぼ適性に合ったポジショニングとすることができる。

MFは、攻撃と守備の両面に参加し、チームをコントロールする役割が主である。従ってスタミナのある忍耐力をもった冷静沈着な判断力と粘り強い着実なプレーを要求されるポジションである。本学部員では粘着型・じっくり型・地道粘り型に多くのプレイヤーを見いだせることは、理想的なポジショニングであったといえよう。

FWはいうまでもなく、どこからでも得点を狙える選手でなくてはならず、正確なボールコントロールはもとより、鋭い状況判断、機敏な動作を要求されるポジションである。本学部員の多くの類型であるじっくり型・地道粘り型タイプのプレイヤーでは機敏な動きや場面への適応は遅いが粘りはある程度の持続ができそうである。ま

た、朗らか型のFWは、動きは活動的で機敏な面もみられるが、粘りの点では不足しがちである。このようなFW陣ではどうしても迫力に欠ける点はいたし方ない。ただ、時として分裂型のFWは、自分に適したポジションであるとみえて、点を取ることに関しては積極果敢なプレーで味方の勝利に貢献した選手もみかけられた。

次に合宿練習における精神健康度の変化については、表5 のようになる。

表5 合宿前後の精神健康度の変化
(レギュラーとサブプレーヤーの対比)

S.51. 3～4 合宿
参加16名

合宿前・後 精神健康度		前 (合宿初日)	後 (合宿最終日)
レ ギ ュ ー ラ ー	高 度	7	4
	中 等 度	5	8
	低 度	0	0
ブ サ ブ プ レ ー ヤ ー	高 度	2	2
	中 等 度	1	1
	低 度	1	1

精神的健康とは、『個人が最高の有効性、満足感、愉快さ、および社会的に望ましい行動の状態において、自己および周囲一般に適応することと、人生の現実に当面し、それを許容する能力をいう^{2),7)}。』と定義づけており、精神健康度が高いということは、「いかなる環境の変化のもとにおいても、知的・情緒的に自己を保っていくことができる。」ということの意味している。

この表5は昭和51年度春季合宿参加者（2～4年生）16名の合宿第1日目と最終日（9日目）の精神健康度の変化をレギュラーとサブプレーヤーに大別したものである。51年1月～2月にかけての八王子市民新春ミニ・サッカー大会に優勝し、チームとして盛り上がっていたのか初日の精神健康度は、高度の者が多いことに注目したい。また合宿最終日になっても精神健康度が低度になった者はレギュラーについては一名も見られなかったことは、部員の今シーズンに向けてのまとまり、やる気のあらわれと考えられる。精神健康度が低度の者は、いずれも入部してから間もない学生であり、初めての合宿体験で緊張の連続であったせい、技術的にみても上達の度合いが遅く、もたつきが見られた。

同様に、合宿第一日目と最終日の全部員のU・K曲線の平均曲線は、図1に示すよ

サッカー選手の性格に関する一考察

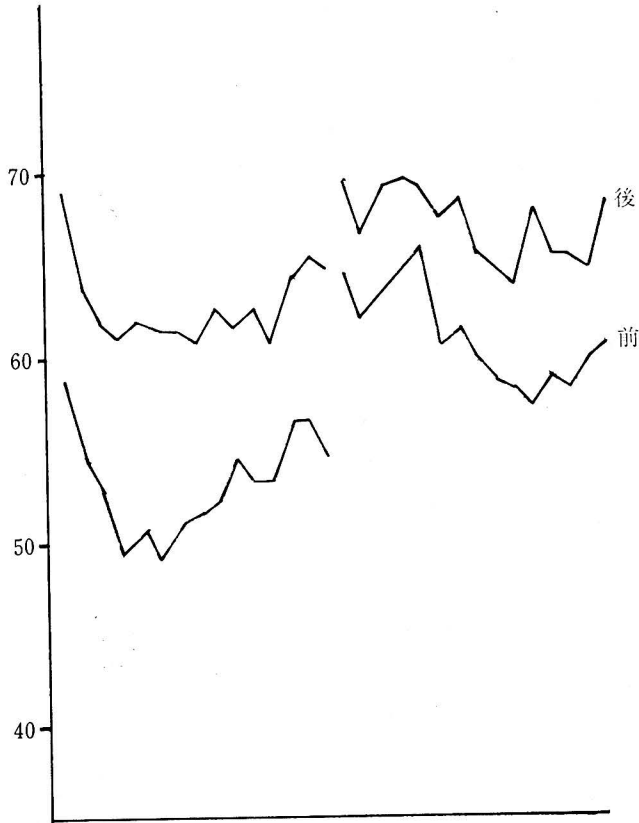


図 1 昭和51年春季合宿前・後の平均曲線

うである。

これによると、初日の平均曲線は、前半はV字形、後半はW形という平均的な健康曲線を描き、精神健康度の高い曲線となっている。しかし最終日には、作業量の絶対量は増加しているも、曲線が平坦傾向となり、精神健康度の面からは全体的にやや下降傾向にあるものと読みとれる。このことは、初日は精神的に余裕があり、次から次へと意欲に燃えていることがよく出ているが、最終日には合宿による疲労が出て来た為か、とりつきは遅く、柔軟性に欠ける面もみられるが、粘りはあるように思われる。

次に個人ケースとして各年代の主将の人柄について検討を加えてみることにする。

B) 個人ケース

(例1)

図2に示したものは、昭和50年～51年春までの主将の曲線型である。曲線はいずれ

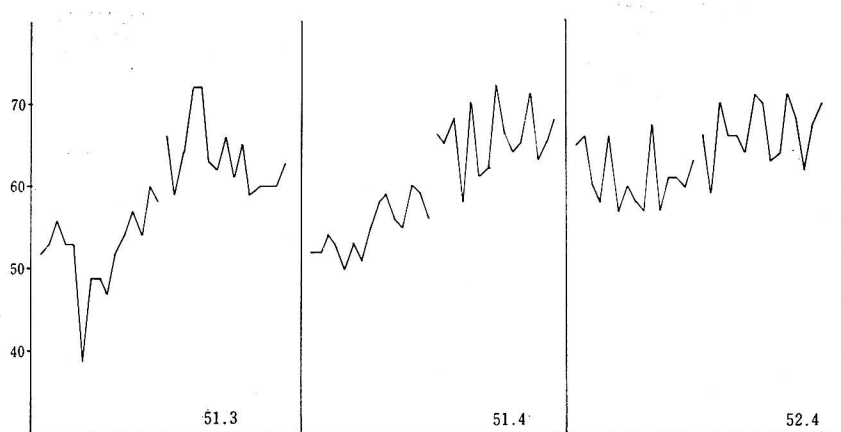


図 2 昭和50～51年度主将T「分裂型」

のときも前・後期とも初頭がひっかかり、鋭い出入りをともなっている。合宿初日には停電現象ともみられる大きな陥没がみられる。また合宿最終日の前半部は、なにかのっぺりとしている面もあるようである。精神健康度の面からは、初日は中上度であるが、最終日には中等度となり、多少健康度を落している。このことは主将という責任感と合宿による疲労の影響が出ているものと考えられる。またこの学生は一年留年し、次年度の春季合宿にも参加しているが、そのときの精神健康度は中等度となっている。曲線型からは、過去2回の調査時と較べて、安定しているものと思われる。本人の印象はどちらかといえば、引込み思案で口数が少なく、プレーの面でも積極性に乏しく、技術の向上にも人一倍の時間が必要であった。反面、主将になることを自分から同僚に売り込んだり、先輩からは声をかけられることを期待している様子もあり、はっきりしない面などが感じられた。ポジションはFWとMFを兼任した。Y-G検査はAB型であるが、上記の観点から分裂型に属すると判定した。

(例2)

図3は昭和51～52年春までの主将の曲線型である。ポジションはMF。50年10月の曲線型は、のっぺりとしてあまり意欲が発動していない状態と考えられる。合宿に入ると曲線型はいずれの場合もあまり動かず、平坦傾向がみられる場合が多い。時として、固執がみられたり、爆発とみられる曲線もある。精神健康度はいずれの曲線においても中等度となっている、この学生のサッカー歴は長く、高等学校時代から約7年間になる。2年次の八王子支部長時代から過去の経験を買われ、新入部員をはじめ、他の部員にも指導をまかされ、皆からの信頼も厚いようであった。プレーは積極性に富み、練習でも納得するまで繰り返し行い、試合中は常にボールに近寄り、攻守にわ

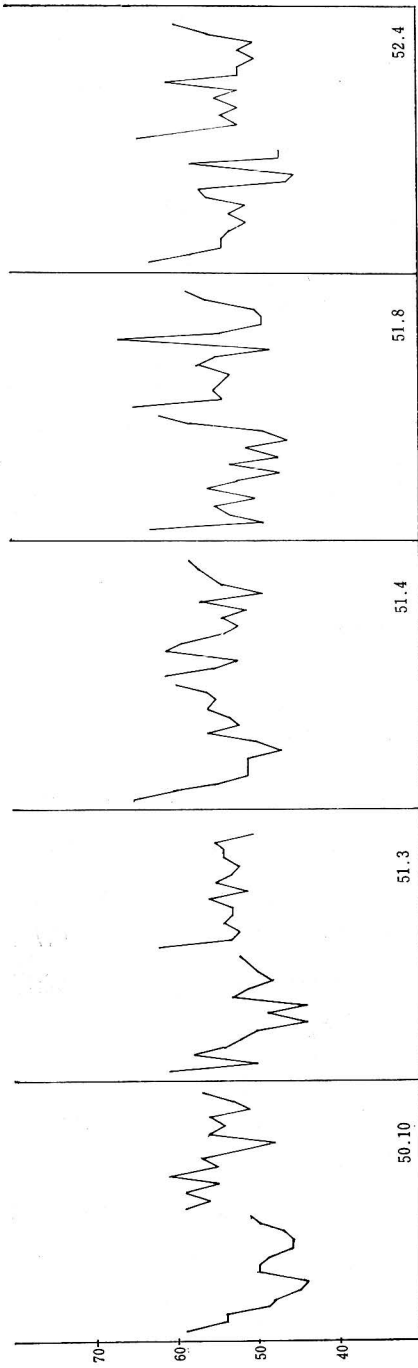


図 3 昭和51～52年度主将E「粘着型」

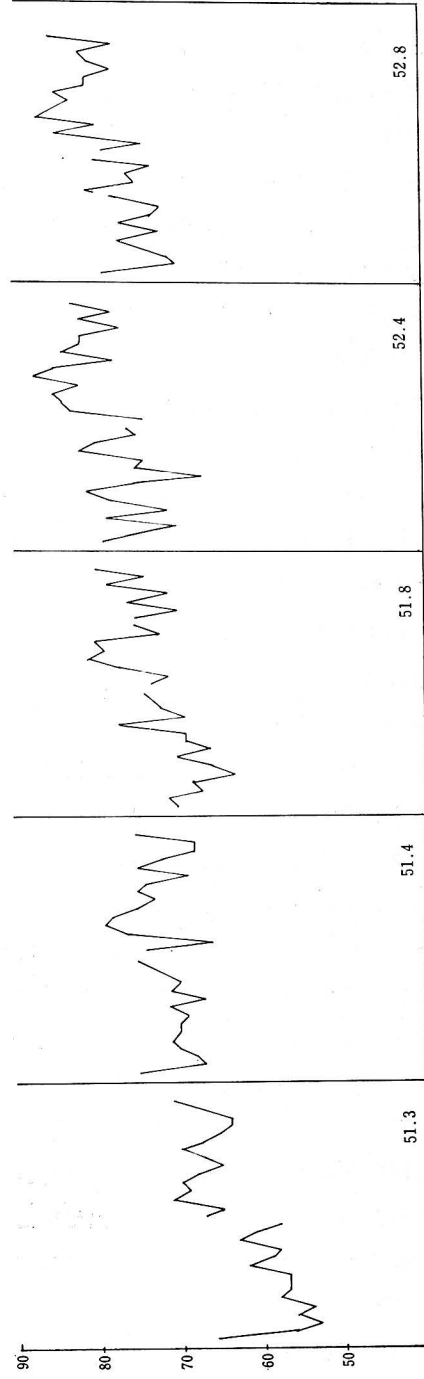


図 4 昭和52～53年度主将S「地道粘り型」

たってチームのコントロールタワーとしての役割りであった。主将になってからの爆発は、チームが自分の思う様なプレーを出来ないでいるいらいの表われによるものと考えられる。Y-G検査はA'型に属する。以上の観点から粘着型と判定した。

(例3)

図4は昭和52～53年度の主将のものである。大学に入学してからサッカーを始めたが、身長183cmと高いので最初はFWであったが最終的にはDFとなっていた。曲線型はいずれも後期初頭が出ず、なか高となっているのが特徴である。2年次の春季合宿時(51年3～4月)は、合宿の疲労のためか、精神健康度をいくぶん落している。上級学年になるに従って精神健康度は中等度から中上度と読みとれる。主将になってからの曲線は、出入りがかなり鋭くなってきており、性格上の欠点である意志表示が下手による短気といった面がでてきていると考えられる。コーチのみたプレーのタイプとしては、自分から相手に挑むような積極さには乏しいが、一生けん命にもくもくとプレーを続けていく守備型といえる。どちらかといえばとりつきは遅いが、言われた事は忠実に実行しようとしていたようである。Y-G検査は典型的なA型である。以上の観点から地道粘り型に属する選手と決定した。

(例4)

図5は昭和53～54年度の主将の曲線型である。ポジションはFW 曲線型としては1年次の夏合宿は比較のおとなしく、丸みのある曲線型である。精神健康度は中等度とみられる。八王子支部長時代は、ところどころ大きな陥没がみられるが、責任感からか新入生に短気で怒りっぽい面になったことはその表われといえる。主将になってからも、曲線型では相変わらず初頭の出は良いが、夏合宿時の作業量が前半急激に減少しているのはどうしたことであろうか。彼のサッカー暦も長く、高校時代からFWであった。学生時代のプレーの印象としては、きびきびした動作で、長くあれこれと考えるよりはともかく実行するといった感じであった。試合中は多少強引と思われるプレーを苦にせず行い、味方の失敗に大声でののしったり、あるいはなぐさめたりしていたが、いつまでも後に残すことなく、すっきりとしていたところがチームメート、特に同学年の者とうまくやっていけた彼の特徴と思われる。時としての静かな面もみられたのは、「うつ」の気分が出ていたものであろう。Y-G検査はD型である。以上の観点から朗らか型に属すると判定した。

(例5)

図6に示した曲線型は、これまでに最も多く得点をあげているFWプレーヤーのものである。合宿初日の曲線は、前期わん曲、後期なか高で不規則な出入りがある地道

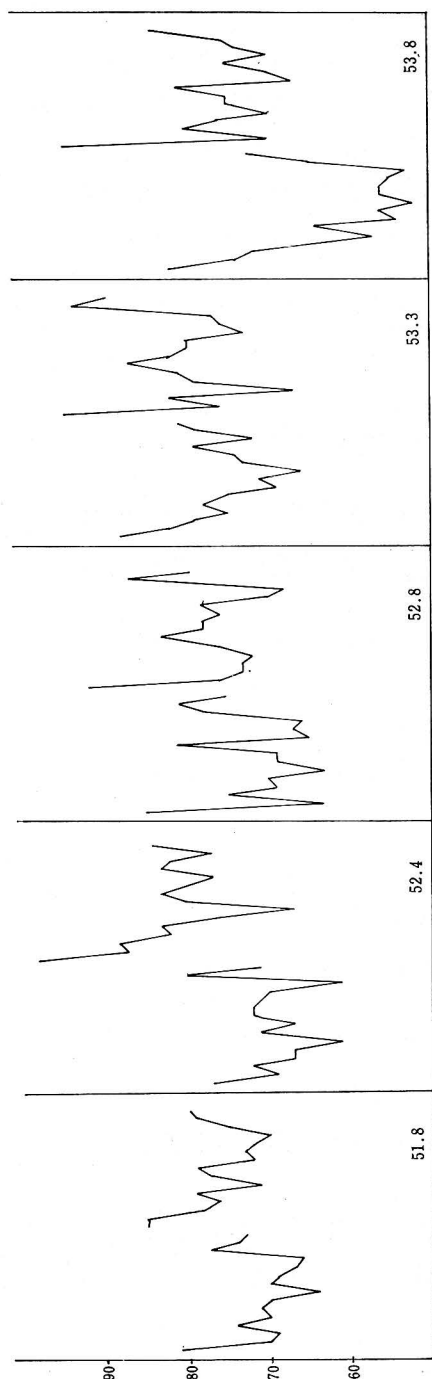


図 5 昭和53～54年度主将 Y・S「朗らか型」

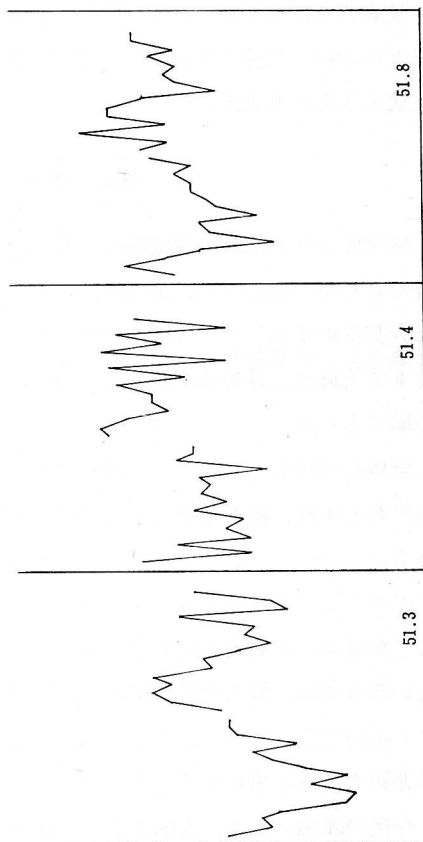


図 6 点取屋 H「地道粘り型」

粘り型である。精神健康度は、中上度で比較的高いと思われる。合宿最終日になると、曲線の出入りが鋭くなっており、神経がビリビリしているものと思われる。従って精神健康度を多少落している。おそらく合宿の疲労による柔軟性の不足からくる性格上の難点が表に出てきたものと考えられる。夏季合宿には再び落ちつきをとりもどし、粘りのあるプレーで点を取ることに凝っているものと思われ、精神健康度も中上度となっている。彼もサッカー暦は長く、技能も確実性が高く、積極性のある粘っこい、執着心のあるプレーが多く見られ、多少のミスもあきらめずに、くらいついたら離さないといった感じであった。Y-G検査はD型である。以上の観点から地道粘り型に属するものと判定した。

IV. ま と め

- 1) 本学サッカー部員の曲線型は、合宿中の最も疲労が蓄積している第4日目頃に実施したものであるので、全体的にやや粘りのないへばりの目につく曲線が多く、また合宿毎に変化している曲線であったので判定するのに困難な点が多かった。
- 2) 本学部員は、分裂型が最も多く次いで地道粘り型・じっくり型・粘着型・温和型の順であった。
- 3) 全体的な特徴としては、行動を起すまでに慎重で手間どるが、確実性がありまじめである反面、精神健康度が低下すると強情、頑固といった行動特徴をもつようである。
- 4) ポジションの適性と個人の性格特性の関連は、本学の学校事情、運動部員の減少などを含め、大局的な見方をすれば、ほぼ適切であったと言える。しかし部員の少ない昨今では、個人の希望するポジションをいかに消化させていくかに指導のポイントが向けられており、なかなか適材適所とはいっていないのが実情であり、今後の課題であると思われる。
- 5) 今後の課題として、人柄に合った適切な指導と技術の向上については、ただ単に練習に時間をかけるだけでなくポジションの適性と個人の精神健康度の根底にある環境的因子を考慮した指導が肝要であると思われる。
- 6) 本研究においては曲線型の判定について未熟なこともあり、判定をとりちがえている面もあろうかと存じますが、先輩諸兄の御指導を切にお願いする次第です。

最後に本研究を進めるに当り多大なる御指導をいただいた、東京工業高等専門学校竹信武助教授に深謝致します。

サッカー選手の性格に関する一考察

引用文献

- 1) 渡部岑生：運動選手の精神特性……ラグビー選手……専修大学体育学紀要 p. 51, 1974.
- 2) 小林晃夫：精神健康度の意義とその判定法 曲線型第2巻 p. 10, 1976.
- 3) 星野隆助：明治大学々生の性格特徴について 曲線型第4巻 p. 53, 1979.
- 4) 渡辺隆嗣：運動選手の精神特性……バスケットボール選手について……本学論叢第13号 p. 45, 1975.
- 5) 渡部岑生：スポーツにおける無関心型の役割——とくに球技を中心として——曲線型第2巻 p. 30.
- 6) 岡野俊一郎ほか：スポーツの科学的指導、サッカー、不昧堂出版、p. 144
- 7) 小林晃夫：人間の理解 東京心理技術研究会 1975.
- 8) 小林晃夫：曲線型の話 東京心理技術研究会 1974.
- 9) 加賀秀夫：スポーツの心理
- 10) 多和健夫ほか：サッカー 大修館 1972.
- 11) 星野隆助：柔道選手の精神特性 明治大学体育研究紀要
- 12) 倉持守三郎ほか：サッカーの指導 道和書院 p. 31, 1972.
- 13) 内田クレペリン精神検査法と矢田部、ギルフォード性格検査との関係について：東京心理技術研究会編 1972.
- 14) 曲線型第1巻：東京心理技術研究会 1975.

(なかやま かつひろ 保健体育 本学助手)

(わたなべ たかし // //)